

光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家
 編集／光の子編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替 東京3-128022
 印刷 (株)ドモン企画



ファイト！

命の息を鼻に

(創世記二・七)

理事長 福島 勲

映画やテレビでは美しい色や明確な音でもって、それぞれの場面を効果的に表現している。

視聴覚に訴えているが、嗅覚は生かされていない。つまり鼻はまだ用をなさない。美しい花園を写出して、ふくいくたる香りが漂えば、どんなにか素敵で、臨場感が高められるであろうと考える。

とはいえ実際には劇場などで、はげしい画面の変動に嗅いが技術的についていけまい。また火野葦平の糞尿譚のようなものの映画は、

それこそ鼻もちならないことになるだろう。

嗅いを必要とするもの、つまり鼻を利かさねばならないものの一つは都市ガスである。危険防止にガスに嗅いをつけている。

人生の危険には、耳、目、鼻など総合的に機能させて判断し決断しなければならない。

些細なことがらと思われることから、いろいろと大きい事柄が誘

發されさている。

パスカルの有名な言葉の「クレオパトラの鼻が、もう少し低かつたら、大地の全表面は變っていたであろう」という言葉は、世の些細なことが、全地、王侯、軍隊を全世界を動かすということのあとにかかれている。

ヒットラーの鼻っ柱がもう少し弱かったら、歴史はもっと穏やかに展開していただろうということも事実だったろう。

人の鼻の型もいろいろあるが、なんだかそれでその人の人格や性格をあらわしているようにも思える。風土の影響があるうか、鼻の長く高い北方系の人々のもの、短く大きい鼻腔の南方ネグロ型のものがある。鼻の機能の一つに吸い入れる空気の潤度や温度の調整をすることがあげられるが、南方では長い鼻は要らないのだろう。

ソクラテスやカルヴァンのよう人の知的だが冷徹さを表徴する

鼻 家康やルターのような泰然とした権威の鼻、それこそいろいろあるが、天与のものはあまり変える必要を感じないが、人為的に代えられる心の鼻の高さなどは、とっとと変えねばならない。

芥川龍之助の作品に鼻というの不格好な鼻の和尚さんが、苦心をして治すのであるが、治ってみても他の人がまた笑う。結局人の満足感などは自分自身でなく、外部の人によって左右されるものだと

いっている。

いやだな。自分の幸いや自分の満足が、自分によらないなんて。しかし、生まれつきのままの自分が、自分のその域から脱出できない。聖書には神は土で人を造り、いのちの息をその鼻に吹きいれられて、今は生きるものとなつたと記されている。

今のときは、人も世界も悪魔的靈力に汚染されている。

神の靈気の吸入を必要としている重病患者である。

神の靈氣に鼻を向けよう。

同労者

施設長 今関 公雄

当施設の創設の原点は、子どもたちのための子どもの施設づくりつまり真に子どもが主人公となる施設生活の形成があります。それは養護施設が、親の病気、離別などのによる人所児を養育する社会的任務を自覚するとき、最も弱い子ども代替親（家庭）を果たそうとする居住型施設の実践原理でもあります。

数年前、ある養護施設で三人の福祉職員が出会いました。その施設は戦後の混乱期より養護事業を始めたため、いわゆる大金制の養育方式で、養護活動で何かと困難があつたようです。とくに子どもたちの遭遇を高めようとすれば、必然的に経費がかさむことになり、管理・経営の圧力と児童待遇向上の板挟みの中で、彼らは悩み葛藤したのです。そして管理著との経常針とも合わなくなり、退職に到了たと思われる。

このような経緯のなかで、本当に方針とも合わなくなり、退職に到了たと思われる。

さて職員たちは、発起人や私をして、これに賛同し支援を惜しまず、定員三十名で各家十名づつの小金制による家庭的待遇を志向する施設建設に共鳴し、四人目の同志として加わったのです。

さあ見せていた。

丁度、経験者と新卒職員とが半々となりました。みんな気のいい仲間たちで、草創の労苦を分かち合いました。

こうした私たちの働きを、支援下さる皆様も、本当に心強い同僚者と考え、そのご支援をお応えくださいよう、とりくみ続けます。

合ってきました。施設の開設が三月も遅れ焦躁と不安のなかで、地元の人々に理解を求めての戸別訪問、コンクリートの壁を磨き、掃除、はては行詰った経済のことまで…。苦しみ、汗を流して祈り合って受け入れに備えた日々がつい先日のように思われます。

責任担当制のなかで、担当保母が子どもとの生活を家づくりから助けて補い合うかたちでやってきました。確実に子どもの表情が明るく変化し、大きく成長しつづけ、それと共に、職員の著しい自尊的につくりみ、非担当職員がそれを助け補い合うかたちでやつきました。

「福祉は人なり」と言われます。

一人ひとりが主演者となり、生活と労働を交叉させていく。発起人たちの願いを中心とした子どもたちの生活を最優先させるつくりみが成長をこの頃強く感じています。

「福祉は人なり」と言われます。

一人ひとりが主演者となり、生

活と労働を交叉させていく。

私たちの働きを、支援下さる皆様も、本当に心強い同僚者と考え、そのご支援をお応えくださいよう、とりくみ続けます。

エッセイ コスモス

永作 火童（俳人）

あるかないかの風に、咲き残つたコスモスが絶えず揺れていた。それから後の意識が極めて断片的になつた。病室までの長い廊下、カーテンで囲われた薄暮のようなベット、浮遊する世界で右肺を貫かれる感覚、そんなものが白濁した記憶の中で繰り返し繰り返し通り過ぎていつた。

肺がんと判つていたので「がんセンター」に入院する前に、冗談めかして葬式の用意をしておくようにと家人に言い置いたものの、これほど急速に病状が悪化していくとは思つてもいなかつた。すでに両肺は「がん」に侵されていて手術もコバルト照射も不可能な第四期症状を呈していたのである。治療といえば僅かに静脈への点滴による抗がん剤の注入に頼る以外たどる時間であり、薬害から十五分おきに生じる嘔吐だけが生きてはなかつた。昏睡の時間は死へたどる時間であり、薬害から十五分おきに生じる嘔吐だけが生きて

映つた。

「ねえ先生、起こして差し上げたらベットから足を下ろせますわね。」

「手をかしてくれれば大丈夫だよ。」

差し出された柚子は眩しく目に

映つた。

「ねえ先生、起こして差し上げたらベットから足を下ろせますわね。」

「手をかしてくれれば大丈夫だよ。」

やつと息をつぎながら私が答えた。何か相談をしてその内の一人が立つてゆき、やがて大ぶりな洗面器のようなものに湯を汲んでき、台の上に置くと柚子をそれに浮かべた。

「先生、ここへ足を浸けて下さらない。」

抱き起された私はガーゼの寝巻を膝までたくし上げながらゆつくり両足を入れた。

入院してから幾日経つていただろ

うか。時おりは体を清拭してもら

うだけなので、とてもきれいな足

とは思えない。まして急激に十四

キロも痩せた後のことである。皮膚は乾いてそそけ立ち、ひび割れ

入りになればいいのに、残念です

が交代で洗いはじめたのである。

「どう先生、気持いいでしよう」

「ああ、有難とう。冬至湯だね」

誰かが顔をそむけて、嗚咽をこらえるように肩をぶるさせている。その隣の一人はうつむいてすね。」

「手をかしてくれれば大丈夫だよ。」

家族ならともかく、他人の足を

祈るようにして洗ってくれている

この人たちは、すべて立派な社会的地位にある婦人たちである。こ

この人たちに私は何をしてあげた

だらうか、俳句上の仲間に過ぎない筈なのに、これほど真心をこめてして呉れていることに涙をこ

輝いて見えた。

あれからもう二年も経つたので

育ちゆく子らと 5

秋元 光代

現場から

そんな二郎君が赤ちゃんのよう

に驚いたり、緊張したりしたので

す。もつと心の変化や状況に注意

すべきでした。

いのかも知れない。この春、伺つた、岩崎美枝子先生の講演で、自分の欲求をみごとに表現して赤ちゃん返りをした2歳の女の子のことを思い出しました。

二郎君と山中兄弟の末っ子の六夫君は同じ年です。私たちは、二郎君の方が体も言葉の発達もずっと勝っているので、六夫君とよりは、一つ年上の太郎君とい一緒

に見でします。

二郎君は、八月の末に、お兄さんたちがタカラクラブのお招きで軽井沢にお出かけし、お留守番したとき、隣の佐藤家の照子さんやT君たちと行つた東武動物公園の

ことがとても強烈な印象で忘れられません。

「六ちゃん、動物園にいった?」

今日も、いつもの質問が始まります。「うん、でも二郎君と一緒になかつたね」これもいつも交わらない返事に「そうか、六ちゃんもいったか」と、八月に三歳になつたばかりの二郎くんは、いつものように満足します。とても同じには見えないが、子ども同志ではわかるのだろう。きまつて六夫君と自分を比べます。

あの動物公園では、入所以来恐怖感を知らないのではないかと思つほど、自由で、腕白そのもので怖いものなしの二郎君が、喜ぶだろ、はしゃぐだらうと思つていたら、駅まで送つてもらった車を降りた時から、全身を固く緊張させ、顔もこわばつてしまいました。動物園でも、見るもの全てに驚き、不安がり、二ヶ月を過ぎた今まで言い続けている程の刺激を受けたのです。二郎君が何回もいつまでも言い続けるのを「珍しかったから」「楽しかったから」と最初は簡単に考えていました。

八ヶ月前にやつて来た頃から、近くの田園にはまつてドロンゴになつて泳いでいたり、大人や自分よりはるかに大きな子に叱られても平気な「逞しい」「ひとりで生きている」という印象で、もしもこのことを考えて、ハラハラしたり生命身体の安全に一番気を配らなければなりませんでした。

一日中ダッコを要求し、少しづつ自立していくお兄さんであつて欲しい私の思いとは逆にどんどん赤ちゃんと返つていきました。殆ど一日中、指をしゃぶりながらダッコやおんぶをせがみ、夜は保母の布団で一緒に寝なければ眠れなくなつていきました。あまりの変化に、私の考え方や対応を検討して誰とも取り替えられない、かや見かけは太郎君と交わらないけど、風邪も引きやすいし、虫さされにも負ける。もしかしたら、今の二郎君は、六夫君よりずっと幼

光の子らしく 4

岩崎 まり子

現場から

早くおいで

「まり子さん、いいものだよ、

いいものー 美しい夕日、夕焼けー いつか私がそう言って皆呼び集めたように、今日は、Aちゃんが私を呼んでくれました。西側に面した階段の真ん中に、ずらりとならんだ子どもたち。どの顔も夕日に映えて、生命まで染あげられていく、そんなさまが透けて見えるようです。

窓枠という額縁の中の映りゆく一枚の絵。そして、一人ひとり抱く思いは違っていても、同じ情景を見、感動できた。そんな時間過ぎごすことができたとき、私は豊かさを感じます。美しいものをちゃんと表現することができる人になって欲しい。いつもそう願つてきました。

九月十八日、S君とCちゃんの兄妹が夕日仲間に加わりました。S君は、小学四年生、肥満気味

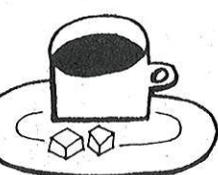
というよりは、がっしりとした体型と言いたいような、何にでも一生懸命取り組む野球少年です。Cちゃんは幼稚園年長組の、寂しがり屋で誉められたがり屋。でも小

さいお友だちのいいお姉さんです。

この兄妹の絆はとても強く、親たちは虐待の嵐のなかをお互いに身を寄せ守りあって生きてきたのです。きっと自分よりも相手が助かります。それを願つてきました。私はそれが考へるよりずっと深いところを願つてきました。私はこのことを願つてきました。

私がここですることは、子どもたちが、これまでの自分の歴史を成長するための環境の一部になるために、自分自身をまず訓練しなければなりません。そうでありながら、何をどうすれば訓練になるのか、その第一歩を踏み出せない自分に苛立ちます。

私がここですることは、子どもたちが、これまでの自分の歴史を成長するための環境の一部になるために、自分自身をまず訓練しなければなりません。そうでありながら、何をどうすれば訓練になるのか、その第一歩を踏み出せない自分に苛立ちます。



九月十八日、S君とCちゃんの兄妹が夕日仲間に加わりました。S君は、小学四年生、肥満気味

十才になつたS君を入所の時点から化し成長し合つ「時」を共有します。しかし、当然ですが私たちは

あの人には、愛されてきたと言つて、あの人には、愛されている

廊下を通り、窓を開ければ子ども三軒の子どもの家に二八名の子どもたちが九名の職員と一緒に暮らしている。

人ひとりの子どもについて、こうなふうに育って欲しい、これだけは何とか克服してほしい、そんな願いを整理して、個別の養護目標を作成して子どもとの生活創りのなかで関わり続ける。また、入所するまでに、あまりにも多くの人たちに入れ替わり、たち替わりた。毎年親が異うという家族は多かった。毎年親が異うという家族は多かった。

言える。また、施設職員は、中に人は人間嫌いな者もいるが、実に気いい、世話好きな、お節介な人々なので、一層そうである。

それでも、責任担当制、家庭的処遇を追求していくなかで、例外なくセクショナリズムという殻の中で、自分だけの城を築いてしまう。一軒の家に一人の担当者を置き、十人以下の子どもとで一世帯

「お休み?」「いや、お出かけよ」「じゃア、行ってらっしゃーい」
「倉ちゃんやまり子ちゃんの言つことをよく聞いて、お利口にして待つててね。行ってきまーす。」

園庭の枕木の歩道から事務所の建物に見えなくなるまで、まだ篠のかかっているダイニングの窓からNちゃんは見送っていた。

館山は休みで来ないのでではなく

心の清い人々は……

菅原哲男

養護施設認光のことの家の家は、家庭が、誰もがそうは願わなかつた事情によって、崩壊し、人が生きる基準を、誰もが共有することの困難な——それは、人が最も深くまじわるべき『愛』においてさえも——現代を漂流してゆく家族たちのなかの、最も弱い子どもたちが、安心して、願わしい暮らしをしていくために建てられた。

ない子どもたちと、何よりも家庭的な状況をどのように生活する家庭的な状況を作らうと考えて、年令を縦に構成し五人を超えないよう子どもを担当者と子どもたちが創り出す特性ができるだけ尊重し、それがよりよく進められ、助け手となるために、施設員、書記、調理員、指導員など全職員がそれをとりまく。

形となる親子関係を充分に持てなかつたハンディを拡大しないことや、可能な限り継続的な人との安定した関係を経験させたい。そんな狙いで、担当替えはしない。これを私たちは責任担当制による家庭的処遇と呼び、追求している。施設養育という状況では、実に多くの人間関係が雑然と溢れている。人と人との関係の非代替性な

れぞれ中心とし、非担当者などを半径とする楕円形が一軒を形成してお互いが関わり合うのである。

五勤一休の週休の朝、仙道家の館山はNちゃんと目を覚ます。勤務が終わった昨晩は、アパートに帰らないでNちゃんを抱いて寝て寝てしまつたものらしい。パジャマを着けていたので眠りこけたのではなく、そのまま朝食を皆と摃り、

採光二年目のこの頃

石毛照子

深夜の病院に泣き声が響きだたる。T君のうなざれている声である。39度以上の熱が続き、食べ物を呑つけなくなり、川崎病と診断され、苦しい入院の日々が始まる。

一日二回何時間もの注射、点滴

の痛みを歯をくいしばり、涙を流して堪える。しかし、肉体的な苦痛よりも更に苦しい状況がT君にはある。他の病室からも苦しい声は聞こえてくるが、楽しそうな物音や優しい気配も流れてくる。母と子、父と子、家族、普通の家庭の様子があちこちの病室に溢れ、病院の建物に満ちてくる。そんなことどもに触れる度に心痛むのは看病の私より三才のT君であることをしばしば感じさせられた。

病状が快方に向かいベットから起き、歩行の許しを得ると、廊下の散歩、屋上に出て外の世界に触れるのが日課となる。屋上からいきTヨーカドーが見える「あの下にMちゃんがいるんだよね」Mち

さんは一才になる妹である Mちゃんのいる乳児院にはイトーヨーカドーの前を通って毎週逢いに行っていた。「よくなつたらまたいこうね。」「Mちゃん元気かな」たった一人の肉親である Mちゃんのことによく話す。忙しい仕事の合間をみて光の子どもの家の職員も見舞いによく来てくれる。T君の顔に笑顔が溢れる。それにしても、職員以外の唯の一人も T君を訪れる者はなかった。

この一年は何をするにも充分注意するようお医者さまから念を押され、一月弱の入院生活を終えてとても頑張ったが少々泣き虫の甘えん坊になつた T君が、園庭を走ったりするとハラハラして手を伸ばしたくなってしまう。

その後の精密検査も異常なし。ホッと胸をなでおろす。

入院の間も、三日に上げず熱を出していた退院後も、留守を守り見守ってくれた五才の Tちゃんの

“コレックライノオ弁当箱ニ・
・“ととても上手に唄つてまわり
の人を驚かせるMちゃん。レバー
トリーも五・六曲ある。誕生日に
は、と期待したが、お部屋では元
気なMちゃんも皆の前だとあがつ
てしまい急におとなしくなってし
まいました。口ぐせに「T君お兄
ちゃんなんだから」と言い、「M
ちゃんかわいい！」と言われると
顔をほころばせるT君。これから
どんな兄妹に育っていくのだろう。
本当に二人ぼっちの兄妹である。
父の顔も母の胸もおそらく憶え
ていらないだろう兄妹だからこそ、
せめて二人が同じ家で暮らすあた
りまえの生活を何とか早くさせた
いという私たちの願いを、ご理解
下さった児童相談所や乳児院の方
々に感謝します。私たちを信頼し
がいよいよ入所して佐藤家は賑や
かになりました。

子どもたちの数が増え、もう一
巡りの季節が過ぎました。土台づ
くりからかかわって迎えた二年目
の重さを感じながら、子どもたち
の成長に追いついて行けないもど
かしさを思います。一年を精一杯
生きて伸びてゆく子どもたちがま
ぶしく 時には羨ましく思います。
いたらなきを許してもらえるよう
に、日々の生活を占検し直してい
こうと考えるこの頃である。



日
誌
抄

八月十六日(一)
十月十五日

家のみんなで楽しいお祝い。

三十日 さよなら夏休み野外夕食会。海へ山へ、そしてお家へ帰った子、保母さんのお家へ行ったり、人々の善意と自然の恵みに包まれて、一回り大きく育つたこの夏に感謝し、二学期へ!

八月十五日 株式会社タナカ社員一同様より、光の子どもの家のためのチャリティバザーを催し、ご寄金が。社長様始め社を挙げのご支援に心から感謝。

二三日(二) 軽井沢へ。

タカラクラブ(会長: 濱沢多歌子さん)のお招きで、学童、幼稚園年長組と職員の総勢二五名が、山登り、博物館、牧場、散策、バーベキューなど素晴らしい自然と高原の生活を満喫。ありがとうございました。二七日付読売新聞埼玉版にこのことが紹介されました。

二三日 留守番のチビちゃんたち

が東武動物公園へ。日頃は怖いもの知らずの腕白さんも、初めて見るライオンやゾウさんに驚いたり、感心したり、緊張と感動の一日本でした。

二七日 天涯孤独のT君の妹Mちゃん乳児院より入所。兄さんと同じ佐藤家石毛保母が担当。翌日が二歳の誕生日。お兄さんや

十九日 仙道家のK君の父さん来訪。離婚して親権を持つ母親が

家裁にしたと。まず、K君の生活をよく見て。ということで降園してきたK君の部屋で会うが、お父さんが何をしててもK君の全面的な拒否。今後のことなど早急に母親との協議を約束。

二三日 K君の母、父、施設の三者協議。K君のために、これまでの経緯にこだわらず、できる

ことをしていく。光の子どもの家の責任の範囲で父親の関わりを持つ。毎月協議する。家裁の申請を取り下げる。など七項目を確認。K君に三者が事情を説明、改めて父親として関わることを告げる。三十日來訪した父

親と半日遊び、夕食、入浴などを一緒に。帰る時、父親の後を追い声をあげてK君は泣いた。

反射光

柔らかくなつた日の中を風の色になつてコスモスが舞

い、園庭の砂場の子どもたちの影が伸び、呼び合う声がきらめいて空へ抜けていきます。漸く関係官

府や支援して下さっている人々、仲間の皆さんをお迎えし創立一周年を記念してお披露目し、感謝の

集いを開きます。○ここへ辿り着くまで実に多くの障害——同じ仕事に関わる者たちの悪意に満ちた奸計など、多彩でした。○障害の一つひとつを乗り越える度に鍛えられ、多くの協力者、支援者が与えられ、光の子どもの家の基盤が固め、強められました。あの奸計も悪意さえも必要なものとして備えられた

と感謝します。○子どもたち共々精一杯おもてなしします。可哀そ

な子どもたちなどとお考えにならぬ子どもたちなどとお考えにならず、自分の家の普通の子どもに対するように、何でもお申しつけ下さい。不作法は叱って下さい。子どもを見て、到らないところは私たちに教えて下さい。○そうして子どもを愛して下さい。そんな機会になれるよう願います。(哲)

十四日 日本キリスト教団埼玉地区青年部 西千葉教会高校生の合同ワークキャンプ。枕木の底上げ作業に汗。汗。汗。感謝

十九日 白山一郎(八歳)次男(五歳)入所。佐藤家石毛保母担当

十日 幼稚園運動会ファイト(ぐら)